

採択者はこうしてみた！！

1. 申請の課題名などを考える際に気をつけていること

- ・ 具体的なイメージを持ちやすいように、言葉を選ぶ。
- ・ 同じ領域の科研タイトルをチェックして、独自性が出るようにする（重複しないようにする）。
- ・ 審査者の注意・興味をひくようなキーワードを入れる。
- ・ わかりやすさ、インパクトのある言葉や表現を使用する。
- ・ 具体的にわかりやすいテーマとする。
- ・ その分野ではまだ新しい概念を取り入れた研究であることをアピールするために、キーワードを入れたこと。
- ・ 研究内容がより明確に伝わる課題名にすること。
- ・ ①当該分野の人なら誰が読んでもわかるような用語を使う
 - ②適度な限定（文学では、作家、作品、時代区分など）をかける
 - ③①②を踏まえつつ、当該分野で流行のキーワードを少しだけ（アクセントに）取り入れる
- ・ 個人的には地味な題が好みであるが、申請書は採択されなければ意味無いので、審査員を意識してその分野の先端的表現を多少入れる。
- ・ 最低でも 2, 3 年の研究時間をかけることを考慮し、論文タイトルのような限定的、かつ細かい題目にせず、一目で研究の全体像を把握できるような課題名とする。
ただし、「～について」といった曖昧な印象を与える表現は（たまにみかけるが）、個人的には感心しない。
- ・ 文字数が多すぎないこと。
- ・ 研究目的が明確に分かること。
- ・ 課題の学術的特徴を端的に表しつつ、課題名が長くなり過ぎないようにする。
- ・ 具体的に審査員を想像して、その人が高く評価してくれそうな課題を考える。
- ・ 実際に研究室の学生が着手するであろう方向性から外れないようにする。

2. 研究目的や概要を組み立てるときに気をつけていること

- ・ 論理を整理し、なるべく論点を絞る。（複雑な理屈は、短時間のレビューでは理解できない）
- ・ 研究の必要性とこれまでの自身の研究の関連性を冒頭で示す。
- ・ 研究期間内で実施可能な研究課題を具体的に設定する。
- ・ 必要な連携体制を具体的に記述し、不測の事態が起きても、研究の遂行が可能であることを示す。
- ・ 論の構築が明快であること。研究の実現性と独創性、社会性をわかりやすく論じること。
- ・ 先行研究との関係で意義を明確にする。
- ・ 社会的な問題から、研究の必要性をうったえた。
- ・ 社会的意義を強調すること。
- ・ 一般的にわかる方法を用いる。
 - * 方法の新しさが目的の場合は、その方法を相当かみ砕いて説明する。

- ・目的が複数ある場合は、目的どうしの関係を明確にする。
 - * 目的の重要度（高いほう→軽いほうの順に説明）
 - * 因果関係（複数の目的がどのような順番で遂行され、補完し合うのかなどを説明）
- 実験科学系なので、日ごろから科研費に出せそうなテーマでいくつか予備実験をしておく。このうち、発展性のあるものを選び、申請書には初めてとりかかると、具体的表現がとれて記載が簡単である。また、採択後も研究が順調に先に進む。
- 当然のことだが、人文系の研究であっても、最初から研究成果が具体的にある程度予測でき、自分のたてた仮説に、目的と概要がきちんと照合していて、その流れが第三者に把握できるように記述しなければならないと思う。
- 研究目的が明確であること、社会的有益性があること。
- 概要では、研究が必要であることの根拠をあげること。
- 研究の目的が専門家でなくても納得できるような正当なものであり、しかも自分のこれまでの研究がその路線に乗ったものである、という理論武装をしっかりとつける。
- ・具体的に審査員を想像して、その人から見て3年、4年という期間で着手するにふさわしいスケジュールであると評価してくれるように研究手順を組み立てる。
- ・準備期間を十分設ける。一通り書いたら、少し寝かせる。短期間に書き上げるのではなく、毎日少しずつ手直しする。

3. 申請書の体裁や見かけの問題として工夫していること

- 図を効果的に配置する。その際、図の説明が必要になるよう（情報過多）にはしない。よく見かけるようなポンチ絵はオリジナリティーを下げってしまうので逆効果となる場合が多い（審査の経験上）。
- MS ゴシックと下線の使用
- 研究計画は、分かりやすく示すため、図示
- 自分も読んでみて読みやすい字体や行間
- 太字や下線を適宜使う
- ひとつくらい概念図を入れる
- 申請用紙の枠を最後の一行まできっちりうめる。
- 図を入れる、重要な箇所に下線を引く、箇条書きにポイントをまとめる。など見やすくした。
- ・審査側が短時間に内容を把握できるように心がけること
- ①すっきり見えるレイアウトにする（両サイド、行間などに適度な空白を作る）
 - ②重要なポイントはパラグラフや章の冒頭に短く（1～2行程度）で示す
 - ③②を行ったうえで、②を補足する説明を書く。
 - ④段落分け、常体敬体、一文の長さ、文のねじれなど、基礎的な日本語表記は校正する
- あまり行を詰めずに、読みやすくかつ審査員に理解してもらえるように、わかりやすく記載する。カラーなどの図の挿入は避ける。あまりに凝った図などを書くものは、PC オタクでベンチワークに向かないととられる心配がある。研究業績欄もちょうどページに収まる程度記入する。なるべく、Impact Factor の高い雑誌の論文、ファーストオーサーの論文を選び、マイナーな雑誌(IF <2)

で発表したものは、たとえその内容の水準が高くても省く。

- 改行を多くして、不必要な漢字は使わない。「目に優しい」文章を心がけている。
当たり前だが入力・変換ミスは出来る限り見直して避ける。いかにも締め切り前にあわてて作った文書は読んでいてわかってしまうので、十分見直しに時間をかける。
- 両端に空白を作る。
- ポイントを下げすぎない(9以上)。
- 強調する部分はゴシック体で、下線も使用。
- 図を積極的に挿入し、紙面中の残った部分に収まるだけの文章で全体を説明できるようにする。
申請書を遠目に眺めた時に、太字などで強調した部分が多すぎず少なすぎず、ちょうどいい状況になっていることを確認する。
- 図は綺麗に、Illustrator で作成。知的に面白く書く。印刷状態で、文章や図のバランスが良いように纏める。

4. 研究体制や経費明細を説明するときに気をつけていること

- 研究課題と合致する経費明細になるように、旅費・備品等の計画を練る。
- 自分の研究の場合、海外機関の協力が不可欠なため、自身がこれまで形成したネットワークを明確に説明し、今後の盤石な体制を示す。
- 研究計画との整合性
- 偏りはあっても、ゼロ円の項目をつくらない。
- 規模は小さくなるかもしれないが、研究目的にそった内容を実際行いたかったため、単独で申請したこと。大学院生と一緒に行えば、充分目的にそった内容はできている。
- 無駄のない用途を強調すること
- 研究計画と徹底的に動きのあった経費明細を作る
 - *実際の動きを想定して経費のアウトラインを描いてから、数字を出すという
- 不要な経費は計上しない（満額申請にこだわらない）
 - *とくに物品は必要最小限（金額を上げたいときは、旅費や講演料などの実費を増やす）
- 高額な物品や特殊な物品を買うときは、その必要性をかなり詳しく説明する
- 個人でしか申請していない。実際にかかる費用を正直に申請している。
- 人文系なので、コンピューターなど的高額な備品類、大量の消耗品類は初年度に購入してしまうようにし、次年度以降に余計な物品は購入しないような計画をたてる。
- 何か特定のものが買いたくて、そのために研究課題を立ち上げている、という本末転倒な状況であると解釈されないように気をつける。

5. 過去に応募が不採択になったとき、「後から思えばあれが悪かったんじゃないか・・・」という心当たりがあればご記入ください。

- 読み返すと文章が練れていないのがわかる。
分野やテーマにもよるが、ひとつのアイデアを申請し続けることで、申請書が洗練され、採択につながる可能性もあるのではないかと。

- 研究の独自性のなさ（必要性を説得できなかった）
- 研究課題の実施可能性の低さ（可能性を説得できなかった）
- 誰もが思いつくようなテーマを平凡に語ってしまったと思った
- 応募内容の問題というのものもあるかもしれないが、時代の流れというのものも要因だったように思う。時代の先を行きすぎている内容も採択には難しいのではないか。
- 研究内容、研究業績
- レイアウトが工夫されていなかった
- タイトルが抽象的だった
- 実際の動きと経費が合っていなかった
 - * 経費をスリムにすることで、研究テーマや研究体制も合理的なものになってきます
 - * レイアウトとタイトルも、その流れのなかで整理されると思います
 - * ある程度、研究の枠組みができれば、経費明細を徹底研究することをおすすめします
- 本人の申請書の書き方の問題より、その年の審査員の興味の違い、あるいは審査員の能力が採否に関係することが多いので、不採択になっても、全く同じ申請書を、翌年他の分野で申請する。今回も某分野で不採択になったものと同じものを、他の分野に翌年出したら採択された。競争率の激しい分野、その年度の審査員の質、研究分野のかたよりなどにより結果は左右されるので、別の分野（あるいは同じ分野でも）もう一度同じものをを出してみてもよいと思う。
- お金をもらうことそれ自体が目的になってしまうのは本末転倒だと思う。本学は、前任校に比べても科研費応募に積極的かつ周りも協力的で、科研事務担当の職員の方のレベルも高く、同じ研究内容でも他校より採択されやすい面が、おそらく多々あることだろうと実感している。それだけに、毎回応募することが当たり前の感覚になってしまいがちだが、もう少し公費であることを自覚し、本当に自分の計画に科研費が必要なのか、良く考えてから応募したほうがよい。いかにもマニュアル通りで、独創性もオリジナリティも何もない書類を出されると、審査する側も迷惑だし、またその分審査に時間がかけれないならば、本当に科研費を必要とする研究者にとっても大変迷惑なことである。
- 申請した研究費の半額近くをポストクの人件費に計上したことがあり、バランスを欠いていたかもしれない。